



※ Dolphin Newsletterは、東京海洋大学キャリア開発室からのお知らせです。イベントのお知らせ、事業報告をさせていただきます。

イベント開催のお知らせ

9/25
tue

第3回ワークショップ 「博士の自己ブランディング」

時間：15：30-17：30

場所：品川キャンパス 白鷹館2階 多目的スペース1

様々な分野で活躍する社会人の話から、「博士号取得後のキャリア」を一緒に考えるキャリアワークショップ。今回は各講演者から個別に講演を頂く方式ではなく、複数のパネリストによるディスカッション形式で、博士に必要な自己ブランディングについて議論して頂きます。パネリストにはメディアでの情報発信を含め、多方面で活躍されている現役ポスドク1名を学外からお招きし、そのほか3名の専門家（本学教員2名、および学外のコンサルタント1名）を交えて、3つの小テーマ（自己分析・自己研鑽・自己PR）で議論して頂きます。

※イベントの様子は、USTREAMで全国に生中継します。会場に来れない方もぜひご覧ください。

USTREAM 番組URL <http://ustre.am/N3Mz>

パネリスト



池田 玲子先生

（本学海洋科学部/教授）

テーマ①自己分析



五十嵐 悠紀さん

筑波大学

システム情報工学研究科

コンピュータサイエンス専攻

博士研究員

非数値アルゴリズム研究室

（NPAL）に在籍。2004年下期、2005年度下期と、IPAにより

『天才プログラマー／スーパークリエイター』に認定。CG／UIの研究・開発に従事。プライベートでは二児の母。現在、エンジニアTypeで研究者としてだけでなく、母・ポスドクとしての研究生活レポートを掲載中！



久保村 喜代子氏

（久保村食文化研究所 代表）

テーマ②自己研鑽



中村 宏先生

（産学/地域連携推進機構 教授）

テーマ③自己PR

モデレーター

伊藤健吾氏

エンジニアtype

編集長



※終了後には、“ベルギーワッフルとチョコレート”を楽しむ懇親会も開催します！

イベント開催報告

第2回ワークショップ

「博士のハローワーク」

6/26（火）に開催しました！



▶他大学で博士号を取得し、民間企業で活躍されている、藤井義喜氏（昭和シェル石油 中央研究所／東京工業大学博士課程修了）大島英司氏（鳥取市都市整備部／国交省から出向／北海道大学博士課程在籍）より、**博士号の活かし方について語っていただきました。**

▶続いて、博士号取得者を多数取材した伊藤健吾氏（エンジニアtype編集長）より、「**社会に出て活躍できる博士の共通項**」について、また、本学の木村 凡氏（海洋科学部学部長）と岩坂直人氏（海洋工学部学部長）より、**今迄に出会った「印象的な博士」について講演頂きました**

▶講演者のメッセージを通じ、参加者は博士号取得者がグローバルに、そして様々な形で活躍している事の理解を深め、自身の将来の博士像を膨まらせることができる場となったと言えます。

▶今回、初の取り組みとしてUSTREAMを使用し、ワークショップの様子は全国に生中継、さらに当日は参加できなくても、後日HPで動画で見れる環境作りを行いました。ワークショップの様子は、現在HP上でもご覧頂けますので、ご興味ある方はぜひアクセスしてみてください。

平成24年度 長期インターンシップについて

▶今年度の公募を行い、3名（全員、博士後期課程）より応募を頂きました。7/末の「観測・調査キャリア等審査・評価委員会」で3名全員のインターンシップが決定！8/中旬（佐藤さんは9/末）より約3ヵ月、企業でのインターンシップに参加します。

▶3人にインターンシップへの期待や目標を語ってもらいました！

<石田健太さん：応用生命科学専攻>



研究室に戻った時に困らないようにスケジュールジュールの組み直しをしたので、不安はありません。仕事のプロセスを学びながら、1つでも多くの事を学び、自分の研究にも活かしていきたい。

<鈴木理沙さん：応用環境システム学専攻>



ずっと研究室にいたので、社会人の方と、社会の中で仕事ができることに大きな期待を感じています。最初は言われた事を正確に迅速にやることだけで大変だと思いますが、早く慣れて、先を見据えた仕事ができるようになりたい。

<佐藤誠浩さん：応用環境システム学専攻>



不安もありますが、今は期待でいっぱいです。現場で色々な技術を学べるのが楽しみです。研究とインターンシップの両立になるが、どちらも妥協することなく、頑張りたい！



国立大学法人東京海洋大学 観測・調査等キャリア開発室

文部科学省科学技術人材育成費補助金「ポストドクター・インターンシップ推進事業」

TEL/FAX 03-5463-0575

mail: career@m.kaiyodai.ac.jp

担当：高橋

※本プログラム・事業に興味のある大学・企業・出版社等からのお問い合わせ、見学を歓迎致します。上記までお気軽にお問い合わせ下さい。

※6/26にリニューアルした、キャリア開発室のホームページでは、

◆東京海洋大学の研究室の紹介「**研究室探訪**」◆教職員のキャリア紹介「**私の履歴書**」のページで、本学ならではの魅力をお伝えしています。それぞれ月2回のペースで更新中！今回はその中から一部をご紹介します。近日中にポストドクター・博士のインタビュー企画もスタートします。

研究室探訪



◆神田穰太教授『化学海洋学研究室』

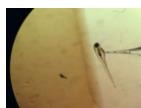
福島原発周辺調査で活躍が話題の『化学海洋学研究室』は、データ測定機器の宝庫でした！



◆木村凡教授『食品微生物学研究室』

いい菌とわるい菌がいました！
食品の未来を変える研究室
『食品微生物学研究室』を
覗いてきました！

◆吉崎悟朗教授『水族生理学研究室』



「サバにマグロを産ませる！？」
研究等で話題沸騰の『水族生理学
研究室』を訪問してきました！…

◆竹内俊郎教授『水族養殖学研究室』



ヒラメ、トラフグ
などを飼育している
『水族養殖学研究室』
を小松先生と一緒に
覗いてきました！



Coming soon!

永井宏史教授研究室『水圏生態化学研究室』

岩坂直人教授『海洋環境科学研究室』

加藤秀弘教授『鯨類学研究室』

を今後UP予定です。お楽しみに！

私の履歴書

◆吉崎悟朗教授／生物生産学講座◆



「サバがマグロを生む可能性」の研究でマスコミにも取り上げられている吉崎先生が、どうして水産の世界に飛び込んだのか？高校生の時に「これだ！」と出会った水産試験場の仕事に就かずには研究者の道を選んだのか、なぜこの研究をテーマに選んだのか？今の学生に伝えたいこと、今後考えていることなど、情熱的に語っていただきました。

※インタビューアー：キャリア開発室／特任教授 小松俊明



Q：先生はなぜ、水産の世界に入られたのですか？



A：高1の時、ある衝撃的な出会いがありました。
釣り好きな少年だった僕が、あるきっかけで神奈川水産試験場に行くことがあって、そこで50～60センチ級のマダイ、インダイ、そしてクロダイを見ちゃったんですよ。いわゆる超大物ってやつですね。身震いしてしまいましたね。こんなすごい奴らと毎日一緒にいれるなんて、もう、僕の将来の就職先はその時点で決まっちゃったんですよ。



Q：でも水産試験場には就職しなかった？



A：当時大学4年生の時に会った2本の衝撃的な論文に出会ったんですよ。「魚の遺伝子組み換え」に関する論文でした。当時、これは最先端の研究だったのですが、国内と海外の研究グループがほぼ同時期に発表したものでした。その内容がすごくて、サイエンスの面白さ、研究の奥深さにはまってしまいました(笑)。結局、就職はせず、そのまま水産大に残り、マスター、ドクターととったんです。



Q：最近の学生さん達に言いたいことは？



A：そうですね。**生意気でいいから、何事も大きく考えろ**と言いたいですね。**根拠のない自信を持ってほしい**んですよ。もちろん、実績を出さなきゃだめだけど、まずは途方もないことを考えたらいい。どちらかという、早く結果が出ることを優先して、小さく考えてしまう傾向があるのは、少し残念かな。例えば、研究テーマだって、小さい命題だったら、そんなテーマ、世の中に五万とある。別にわざわざ、自分がやらなくてもいいというくらいに考えてほしい。そんな大それたことを言うのは生意気じゃないかなんて、思わなくてもいいんですよ。僕は、大きなことを言う学生を評価するようにしていますし、そういうやつにはチャンスを提供したいとも思っています。



Q：アメリカ(テキサス)生活はどうでしたか？



A：あるとき試験管を洗っていたんですよ。そうしたら突然、指導教官に怒鳴られた！お前は何をしているんだって！ポストドクとして勤め始めてしばらくたったとき、指導教官に呼び出されたんですよ。同じようにして働いていたアメリカ人とインド人と一緒にね。そこで言われました。予算が足りないから一人をクビにするとされたこともありました。

3年近くいましたが、アメリカの研究現場が成功している原因は「分業の徹底」がなされていること、つまり研究者が「研究者にしかできないこと」にすべてのリソース(知恵、時間、そして労力)を集中させていることだと気づきました。



Q：先生の研究には、もう一つ大切な目標があると聞きましたが。



A：そうですね、僕の研究が目指しているのは、「**絶滅種を守る**」ことです。

昔、まだ大学院生のこと、大島に行ったら船上からキハダマグロとクロマグロの大群を見たんですよ。これが何となくすごかったんです。それまではマグロはただ食べるものだったわけですが、その野生のマグロの大群を見て、自分はこの種を絶やさないと、何かしなければならぬ、そう強く思ったんです。

木村凡教授、竹内俊郎教授、神田穰太教授、永井宏史教授、松山優治教授のインタビュー掲載中！！

さらに詳しく読んでみたい方は、ぜひHPをご覧ください！

海洋大キャリア

GO

<http://www.kaiyodaicareer.com>